# BIOROID

## 第五話

Bioroid

# ノエル・スイート

Noel Sweet

★――ご無沙汰しております。

「痛ぇ……」

俺は突然、全身に響いた痛みで目を覚ました。

目の前の不機嫌な少女、おそらく彼女がこの痛みの原因なのだろう。いや、それ以前に俺はだいぶ重症を負っている気がする。肋骨かあるいは、わき腹のあたりだろうか、鈍い痛みがこびりついているかのようである。

「よくもこんな馬鹿な真似ができたわね、ロリコン。親バカ。もう少しで地獄行きだったのに」

惜しかったわね、そう零すノエルは、2年ぶりの再会にも関わらず相変わらずの毒舌だった。

俺は痛みで何も言い返すことができず、一瞬の静寂。

しばらくして、ノエルは自身の背後にいる人物を指さした。大柄の男は、知っている。アンダーソン・カイルだ。だが、もう一人は――、

「マーガレットです、よろしくお願いします」

彼女は俺の視線に気づいたのか、深々とお辞儀をした。その丁寧さが新鮮で、俺は思わず彼女をじっと見つめてしまう。

「何、ぼうっとしてるのよ。あんた、2年前と何も変わってないじゃない」

「うるせぇ」

今の脳内には、ノエルの甲高い声がとても響く。俺は彼女に悪態をついた後、ずっと服の裾を掴んでいる娘を彼らの前に押し出した。

「えっと、色々と説明をしないといけないんだが――」

「あなたの娘でしょ、未来から来た」

「え？」

「こっちの情報網を舐めないで。どこで何が起こっているのか、全て把握している」

さすが、先生の代理になっただけはある。そう、俺が感心したのも束の間、すぐにノエルは顔を真っ赤にして、詰め寄ってきた。

「あ、あんたが、その小娘と一緒にお風呂に入ったことも知ってるんだからな!!」

「……え？」

「え？」

俺の上げた疑問符に、すかさず彼女も驚いた。

一緒にお風呂……？

「あー、そういうことか。まあ、説得するのに時間はかかったけど」

「な、なな、何!?じゃあ、あれは本当だってこと!?奏はどうするんだ!!」

ノエルは問答無用で、再び重たい蹴りを俺の足にくれた。

「ちょっと!!パパは怪我してるのよ!!」

「天罰だ!!邪魔するな！」

優迅が止めようとするが、彼女の力は凄まじい。優迅はいとも簡単に後ろへと追いやられた。
「いってぇ……ていうか、奏は関係ないだろ。お前も何を怒ってるんだ、こいつは俺の娘なんだから、別にやましいことはない」
「それは、その」
急にしおらしくなるノエル。何とか嵐は静まったようである。
そんな俺たちのやり取りを、優迅はぽかんと口を開けて見守っていた。
「優迅、こいつはノエルって言うんだ。年も近いし、友達になれるだろ。それと、後ろの二人はアンダーソンと、さっきも紹介があったけど、マーガレット」
俺の紹介を受けて、彼らは優迅に小さく手を振ってくれる。すると、彼女は、おどおどとした様子で小さく頭を下げた。
驚いた、俺にはガツガツ来たのに。意外と人見知りするんだな。
「なんだ、お前。さっきは私に突っかかってきたのに」
「それは、あなたがパパに」

「本当に、パパが大好きなのね」
「ノエル、いい加減にしろ」
俺が制止すると、ノエルは更に顔を顰めた。
「知り合って間もないくせに、そいつばっかり庇うんだな。さすがお父様」
ノエルは皮肉を交えて、そっぽを向く。すると、そろそろ潮時だと感じたのか、この状況を見て笑っていたアンダーソンが前に出てきた。
「放っておいて構わない。うちのお姫様はもともとツンデレだから」
「誰がツンデレだ!!」
背後でノエルの怒号が聞こえるが、彼は涼しい顔で話を再開した。
＊＊＊

## ☆――なるほど

「なるほど、つまり先生の手回しってことですか」

鈴木はアンダーソンからの説明を受けて、やっと肩の荷が下りたような気分だった。そんな彼を見て、アンダーソンもそっと口元を緩ませる。

「なんだかんだ面倒見は良い人らしいな」

「そういえば、俺の家はどうなるんでしょう」

「それは、マエストロか協会に言うしかない」

「ですよね」

何としてでも請求してやる、鈴木は確固とした意志で地面を睨みつけた。

一方、優迅はそんな彼を見て、そっと瞳を伏せた。

「――って、お前のせいじゃないから、心配するな」

そう言って、鈴木は彼女の頭を優しく撫でる。
「確かに先生の家にいた方がよかったけど、最終的にお前を連れ帰ると決めたのは俺だし。というか、一緒にお前の荷物も燃えちまったな」
「それは、別に。大丈夫、たいしたもの入ってなかったし」
「あれだけ大荷物だったのにか」
荷物という言葉で、鈴木ははっと先ほどの疑問を思い出した。
「そういえば、さっきのノートは何だ？」
「ただのノートだけど」
優迅は懐からそれを取り出した。彼女の言う通り、どこにでも売っていそうな、量産品のノートだ。
「でも、あの能力は葵の……」
その人物の名に、優迅は驚いたような表情をした。

そして、すぐに神妙な顔つきで説明を始める。
「私の能力はね、スプリングノートって言うんだって。ママが言ってた。ノートに色々な能力の特徴的なことを書けば、その力を使えるの」
「空間生成まであるのか」
優迅が開いたノートの中には、いくつもの能力名が書き記されていた。その場にいた全員がその特異なものに目を引かれた。
「つまり、他人の能力を保存して、いつでも使えるということかしら？」
「たぶん」
マーガレットの質問に、優迅は頷く。すると、ノエルが信じられないという顔で身を乗り出した。鈴木も、半ば驚いた顔で優迅を見下ろす。
「じゃあ、これ。大切な物なんだな」
「そんなこともないよ。破けたりしたら、新しいノートにまた写せばいいし」
優迅の言葉を静かに聞きながら、アンダーソンは彼女の能力について考えた。

以前、似たような能力があると耳にはしていたが、彼自身、その実在性については疑っていたのだ。

「なるほどな。こんな能力なら、協会も研究所もこの子を連れて帰りたくなるわけか」

「研究所？」

鈴木は思いもよらなかった組織の名前に、目を丸くした。

「マエストロから連絡があってな。それと同時に、未来人の保護を頼まれた。だから、うちの姫様の指示通り、俺たちは助けに来たってことだ」

「協会と、研究所。両方に狙われているのか」

事態の深刻さに、鈴木は頭を抱えた。すると、そんな彼を横目に、

「このくらい、昔に比べたらどうってことないだろ」

ノエルの言葉に、思わず鈴木は顔を上げた。

「そうだな、こんなのどうってことない」

そう言って鈴木はすかさず、作戦を立てることにした。
しかし、問題点は山積みだ。
「うーん」
「この子を安全な場所に行かせればいいんでしょ？」
「そうだけど」
ノエルにもわかるほど単純な話だ。確かに、天城の家にたどり着くことが、やはり一番安全だといえるだろう。だが、そこにたどり着くまでが難しいのだ。協会と研究所の追手を、そうそう振り切れるとは思わない。
「そのまま、未来に戻せばいいんじゃない？」
ノエルの提案に、揃って優迅に視線が集まった。しかし、当の本人は真っ青な顔をしている。
「えっと、あはは」
空笑いを浮かべる少女。それだけで、未来に戻るという手段は絶望的だと察した。

「となると、やはりマエストロの家に行くのが賢明だな」
「マーガレット、ここからどのくらいかかるの？」
ノエルの問いに、すかさずノートパソコンを取り出すと、マーガレットはナビゲーションアプリを開いた。
「車ですと、そこまで時間はかかりませんけど。距離的には都心部へと近づく形ですね」
そういって、パソコンを閉じようとした瞬間、マーガレットはモニター上の異変に気が付いた。
「どうした、マーガレット？」
「これは……」
顔色を変えた彼女に対し、ノエルも彼女の手元に目をやった。モニター上のマップに赤い信号が点滅していた。
「誰かが争っているようです。おそらく、協会と、他の誰か」
「研究所だな、無視して構わないだろ」

「最短ルート上にあるのですが」
「……縁起が悪いな。どうする、お姫様」
アンダーソンは車の整備をしながら、ノエルに問いかけた。
「迂回したところで、いずれ私たちの行動もばれるでしょ。なら、真正面に突っ込むしかない。こっちには5人もいるんだから」
私は戦闘力ありませんけど、マーガレットは付け加えるように手を上げる。すると、優迅も戦闘経験の少なさを報告した。
「……とにかく、出発進行!!」
若干名、意欲はないが、彼らはノエルの指示の元、天城の家に向けて動き出すことにした。
ふと鈴木は、車に乗り込む前に、自身の服装を見直した。薄汚れた車にはぴったりの服をしているが、鈴木の装備は紙しかなかった。そんな彼を見て、アンダーソンは思い出したように、鈴木に何かを投げた。

「これ……」
鈴木の手に渡されたのは、2年前にも使用した彼の戦闘着だった。
「マエストロから渡されてな。サイズも調整してある」
そして、鈴木は2年ぶりに相棒のそれに手を通した。戦闘準備は万全である。彼は堂々とし面持ちで優迅に振り返った。
「もう少し、お前の能力に頼るかもしれない」
「私も役立てる？」
「もちろんだ」
その言葉に、優迅はにっこりと笑った。
「そこの馬鹿2人、早く車に乗りなさいよ」
ノエルが仏頂面で促す。しかし、彼女はどこに乗るつもりなのだろう。
「この車に5人乗れるか？」

「なら、あんたは走る？それとも、そのバカ娘を膝にでも乗せたらいいだろうけど」
「それは嫌!!」
慌てて優迅がノエルの提案を否定する。
「なら、私が乗るわ」
「まあ、お前の方が小さくて軽いな」
鈴木は否定することなく頷く。瞬間、ノエルは顔を真っ赤にして彼に振り返った。
「じょ、冗談に決まってるでしょう!!」
ノエルの怒号が深夜の裏路地に響き渡った。
＊＊＊
☆――レザボア・ドッグス
一発の銃声が、静寂な夜の闇を切り裂いた。

瞬間、ベルナルディはノヴェーラを車に押し入れ、身を躱す。そして、小さな石ころをひとつ落とした。「加速」と刻まれたそれは、小さな光を放つ。

魔法は耐久性が問題になってくる。紙に記されたそれは、インクにより持続時間が長くなる。しかし、それを記すための時間を要するため、結果的に効果が出遅れるといっても過言ではない。

一方、ナイフに文字を刻んで使用する人間もいるが、ベルナルディにそのような趣向はなかった。それ故、彼は落ちていた石ころに文字を書いたのだ。

「ノヴェーラ、早く車の中のそれをこちらに」

再び、ベルナルディが石を投げる。先ほどよりも、強い光を出して、石は爆発をした。

「鈴木聡太は、紙にこだわるが、こちらのほうが楽でいい」

そう呟くと、彼はノヴェーラから指摘したものを受け取った。実際のものよりは火力が劣るが、人間相手なら十分に威力を発揮するバズーカ。

「発射」

彼の声と共に、引き金は引かれた。ボンッという爆発音とともに、大きな煙幕が巻き起こる。

すかさず、ベルナルディは車の影に身を隠して、相手の動きを見計らう。彼の予想通り、研究所の連中は今の攻撃を避けていた。

「ノヴェーラ、一丁ください」

指示通り、ノヴェーラは彼に「グレードランチャー」を手渡す。そして躊躇うことなく引き金を引いた。再び、轟音が響き渡る。

しかし、研究所の名を冠した二人は、依然として無傷で立ち尽くしていた。

「こんなものを、よく持ち歩いているな」

ロベルトは、服についた煙を叩きながら、ぶつぶつと呟いた。

「火力は抑えている。ただの花火大会に過ぎないさ」

「確かに。マルセンも同意する。etcを用いれば何てことない」

やはりetcか、とベルナルディは忌々し気に彼らを見据えた。

「準備しろ、ロベルト。こちらも全力で相手をする」

「ああ、わかっている」
そういうと、ロベルトは右手の親指と中指を擦り合わせた。ぱちんと小気味のいい音と共に、彼の背後からは黒い影が浮き上がる。
「ほう、実物を見たのは久しぶりだな」
ベルナルディが感心するのも束の間、ロベルトは懐からプラスチックの欠片を取り出し、ゴムできつく縛った。
「始めよう」
その言葉と共に、ゴムひもが引かれる。瞬間、それは勢いよくノヴェーラが乗っている車へと向かった。そして、不快な轟音と共に、車体が大きく揺れる。イタリア製の車故、全壊することはなかったが、再び走るには難がいるだろう。
「ノヴェーラ!!」
彼は手を振りながら、平気だという意思を示した。何とか、攻撃の直撃は避けたようである。やれやれとため息をつくと、再びベルナルディは前に向き直った。そして、マルセンに向かって大きく足を踏み込む。

「このようなスタイルは好きではないが、仕方ない。ノヴェーラ!!ロベルトは任せましたよ」

マルセンは改造人間。生身の人間が立ち向かうことは困難である。しかし、ベルナルディは魔法使いだ。一般の人間よりも戦闘経験があり、このような人外に講じる術を持ち合わせていた。

ベルナルディは、走りながら、「加速」と刻まれた石ころを零した。持続時間を計算していた彼は、効果が切れる直前に、もう一つの石をマルセンに向かって投げる。「花火」と刻まれたそれを、マルセンは後方に抜けて躱す。

かかった、そう思ったベルナルディは、勢いよくマルセンに向かって足を振りかぶる。マルセンの背後にはガードレール。後ろには抜けられない。

がっと、マルセンはベルナルディの攻撃を両手で防ぐ。瞬間、彼は石ころを2つ落とした。

にやりと、マルセンが口元を緩める。彼は懐から一丁の拳銃を取り出し、ベルナルディに銃口を向けた。至近距離での発砲、致命傷は避けられないだろう。

しかし、ベルナルディの顔に焦りはない。彼は物凄い速さで後方へと飛びのいた。幸いにも、先ほどの石ころの内ひとつは、「加速」と刻まれたものだったからだ。

マルセンもすかさず、彼の姿を追う。それと同時に、ベルナルディは石ころを宙に放った。
「冷凍」と書かれたそれは、マルセンの体へと直撃し、彼の腕は急速に氷が生成されていく。
「マルセン!!」
ロベルトが援護に回ろうとするが、彼の相手は別にいた。ボウガンの矢が彼の顔を掠める。
「おやすみなさい、マルセン」
ベルナルディは、そう呟いて最後の一撃を放とうとした。
「甘い。ベルナルディ。マルセンは、ただ固まったに過ぎない」
瞬間、マルセンは左手で自身の拳銃を拾うと、迷うことなく、固まりかけている右手に銃口を向けた。
右手の先にあるのは、ベルナルディの姿。彼が放った銃弾は、マルセン自身の右腕を貫通して、ベルナルディの肩へと放たれた。
「くっ」
「ベルナルディさん!!」

「ノヴェーラ、今は目の前の敵に集中しなさい！」
かちゃりと、頭上で音がした。はっとなって、ベルナルディは顔を上げる。
見ると、いつのまにかマルセンが手にしていた拳銃が自身の頭に添えられていた。
「冷静な判断だな」
マルセンは引き金を引いた――と同時に、ベルナルディは、懐から石ころを零す。
それは「石化」と「加速」と書かれていた。体を横に滑らせると同時に、石の重みは重力に引かれて地面に落ちる。万が一、銃弾を受けても最小限の出血に済ませようとしたのだ。
そして、ベルナルディは、石化した状態のまま前後左右へと移動した。マルセンは無表情でその石の塊に銃弾を放ち続ける。
「射撃に慣れていないのか、マルセン」
石化の効果が解けたベルナルディは、彼が持つ拳銃に向けてナイフを放った。見事、銃口の先に命中したそれは、すぐに光に包まれていく。
すかさず、何かを察したマルセンは拳銃を手放した。

「大丈夫ですか、ベルナルディさん」
「ええ、何とか。ですが、大型の武器は扱えそうにないな」
依然として、左腕からは出血が続いている。ベルナルディは、一度、ノヴェーラを振り返ると、再びマルセンへと向き直った。
「お互いに銃器は使えない。これでもう、対等ですね」
そう言って、ベルナルディは石ころを地面に落とす。
「2回戦の始まりです、マルセン」

＊＊＊

☆――宝の持ち腐れ

「くそっ、渋滞に巻き込まれるなんて」

アンダーソンは、目の前に並ぶブレーキランプに苛立ちの眼を向けた。深夜だというのに、大通りにはずらりと赤いランプが点灯している。

おそらく先ほどの爆発が原因だろう。

俺は、前のめりに座っていた背を座席に預けた。

「先ほどの爆発で交通規制がなされているようですね。車が通れる道はここしかないかと」

「つまりは、最短ルートがこれってわけか」

後部座席に座るマーガレットが運転席の彼に、モニターを見せると、更にアンダーソンの眉間の皺は深くなる。確かに集団で移動する方が安全だ。

しかし、このままでは時間がかかりすぎる。更に言うと、車が爆破でもされたら全滅だ。

――何か、別の策を。

俺は目の前の少女、正確には俺の膝の上に座る少女を見下ろした。彼女は、先ほどからずっと口をパクパクとさせている。いわゆる、放心状態というやつだ。仕方なく、俺は隣の運転席に座る彼に問いかけた。

「これ、走った方が早いんじゃ」
「いや、あの爆発でテロの警戒をしている警察がたくさんいるはずだ。下手に問い詰められるより、大人しくこの中にいる方が楽だろ」
なるほど。確かに、こんな深夜にノエルや優迅を連れていたら、変質者に間違われるに違いない。ただでさえ、国家機関の連中と関わるのは面倒くさいというのに、足止めされて見当違いなところに連れていかれるのはまずい。非常にまずい。
「だが、このままここで足止めを食らい続けるのもな」
アンダーソンは先ほどから、ハンドルを人差し指で叩き続けている。彼なりに策をめぐらせているのだろう。
「走っていくしかないか」
「けど、警察連中が」
「一般人相手なら楽勝だ」
アンダーソンはしばらく考えた後、後方のマーガレットへと振り返った。

「徒歩での最短距離は？」
「さすがに徒歩の計算は……地図を書き写しますか？」
「頼む」
どうやら俺の提案は聞き入れられたようである。マーガレットはすぐに紙を取り出して、さらさらと気持ちのいい音を立ててペンを滑らせる。
「上手だな」
「秘書ですから」
得意げに笑った彼女は、その精密な地図を俺に手渡した。あとは、膝の上のこいつをどかせれば――、
「おい、リーダー。お姫様。生きてるか？」
「……へ？」
「降りるぞ」

アンダーソンの問いかけに、まばたきを繰り返すノエル。やがて、状況を掴めてきたのか、大きく首を縦に振った。

「お嬢ちゃんもがんばれよ」

「あ、はい。もちろんです」

優迅は多少のぎこちなさはあれど、ノエルと同じく大きく頷いた。

「車はどうするんですか？」

「そうだな……あそこに止めるしかないか」

アンダーソンの視線の先にあるのは、反対車線の街路樹。どう考えても駐車スペースと言われる場所ではない。違法駐車だ。

「まあ、請求は全部マエストロが持ってくれるだろ」

そう言って、アンダーソンは迷うことなくハンドルを切った。

ガタンと大きく上下に揺れた後、エンジン音が止む。

そして、俺たちは揃って屋外へと飛び出した。

＊＊＊

☆――異常兆候

「……っ」

闘いの最中、ふとマルセンは妙な気配を感じ取った。それは脳内における感覚のようなもので、微細な変化に違いない。

「0.5kmの中に何かが入った。妙だ。例の能力者、未来人と思われる」

標的が自ら迫ってきている。このような好機だというのに、マルセンはこの場を離れることは難しかった。目の前の相手は、依然として敵意の籠った眼差しをしている。ロベルトも、勝利にはほど遠かった。

「ロベルト、さっさと終わらせろ」
「おっと、仲間の心配ですか」
ベルナルディは石ころを投げて、注意を向けた。再び、強い光が一帯に放たれる。
寸前でマルセンは攻撃を躱したが、耐久性が欠片もないワイシャツはただれたように千切れ、中からは白い肌が露わになった。
「これはこれは。目の保養にもなりませんね」
「失礼な奴だな」
「どうせ、中身は40代の男でしょう」
ベルナルディが再び突っ込む。マルセンは、すばやく頭を下げた後、振りかぶられた足を捉えた。そして、一方の不安定な足を狙う。だが、ベルナルディは彼の押さえた手を利用し、後方へと大きく退いた。
マルセンは考えていた。攻撃をするための手段ではない。相手の行動を予測するでもない。彼は、脳内で反応をし続ける鈴木たちについて考えていた

――奴らは、どこへ向かっている。

「考え事ですか、マルセン」

ベルナルディは先ほどよりも素早い動きで、彼に近づく。マルセンは、ベルナルディの拳を躱しながら、必死に考え続けた。

――安全な場所に行くに違いない。安全な場所、安全な場所。マルセンたちが手出ししづらい場所。

「そうか」

マルセンはちらりとロベルトの状況を見た。既に黒い影は破壊され、死体のように地面に転がっている。

「ロベルト、離脱だ」

「させませんよ」

ベルナルディはすかさず踏み込む。

すると、マルセンは飛び込んでくる彼の肩を掴み上げ――。

ふわりと、ベルナルディの体が宙に舞った。

「合気道!?」

彼は驚く間もなく、地面へと叩きつけられた。マルセンは、その勢いのままロベルトへと走る。そして、彼の耳元に口を添えた。

「目標物が近くにいる。おそらく、魔女の家に向かっている」

「それはまずいな。僕らが手出しできなくなる」

そういうと、ロベルトは懐からいくつかの爆弾を取り出した。緑色をした爆弾を一気に地面にばら撒く。

一瞬にして、辺りは真っ白な光に包まれた。

「閃光弾か」

ベルナルディはノヴェーラを庇うことに精一杯で、光が消えたころには、マルセンとロベルトは姿を消していた。

「逃がしませんよ」

すぐに、ベルナルディは自身の運転席へと戻った。ノヴェーラも迷うことなく、助手席に乗り込む。

「ひとまずお疲れ様です、ノヴェーラ。さすがですね、ロベルトを足止めしてくれたおかげで、戦いやすかったですよ」

エンジンをかける。あれだけの衝撃を食らったにも関わらず、この車は軽快にエンジン音を響かせた。

ベルナルディは満足した顔で、ハンドルに手を置き、発車準備に取り掛かる。

――何故、途中で退いた。戦況としては悪くなかったはず。

「そういえば、彼らはどうなったでしょう」

ベルナルディは考え事をやめて、ノヴェーラへと振り返った。

「彼ら？」

「僕たちが追っていた2人ですよ」

「……なるほど」

瞬間、ベルナルディは解を得たというような表情に戻り、勢いよくアクセルを踏み込んだ。
「ベルナルディさん、急発進はやめてください」
「すみません、一度に2つも仕事を終わらせることができると分かったので、つい嬉しくて。魔女の家にたどり着く前に追い付かなくては。あそこは不可侵領域ですから」
「え。でも、ベルナルディさん、そういうの気にしない主義なのでは」
「そうですけど、魔女の家そのものは危険です」
不思議に思って、ノヴェーラは思わず聞き返した。
「どうして危険なんですか？」
「それは――、死ぬから、です」
そういって、ベルナルディはにこりと微笑む。
またひとつ、深夜の道に赤いランプが点灯した。

＊＊＊

## ☆――いやな感じ

「ほら、もっと速く走りなさい」

先頭を行くノエルは、腹立たし気に最下位の俺を振り返った。

「無茶言うな、俺は怪我人……」

ふと、脳内にあの女の顔が浮かぶ。いくら出血をしていようが、涼しい顔で銀髪を風になびかせる女。今更、あいつの体はサイボーグか何かのように思えてくる。

今頃、どうしているのだろうか。マンションの爆発はおそらく彼女の耳にも届いているだろう。終始、文句を垂れてる図しか浮かばないな。

「パパ？」

隣を走る優迅が不安そうに俺を見上げた。

「ああ、大丈夫だ。死にそうだけど」
「それは大丈夫とは言わないでしょ」
「仲がいいんですね」
顔を上げると、すぐ目の前を走るマーガレットが微笑ましそうにこちらを見ていた。
仲がいいと言われるのは、若干照れ臭い気はするが、
「まあ……俺たち親子ですから」
優迅が嬉しそうな笑顔をしているから、まあいいだろう。
「久しぶりにお会いされたんですね」
「はい、ママ以外とはしばらく会えていなかったんで」
さらりとトラウマのようなことを告げる優迅。彼女はすぐに、相手に気を使わせまいとフォローを入れた。
「あ、そんなに可哀そうな感じでもないですから。ママの家で暮らすのも楽しかったですか

ら」

「そうですか、よかったですね」

ランチタイムのように軽い女子トークをしているが、２人とも走りながらである。

息切れ一つせずに交わされる会話に、俺は感心した。アンダーソンでさえ、走ることに集中しているというのに。２人とも、恐ろしい体力だな。

「お母さまは何の仕事を？」

「ええと、会社員だっけかな。詳しくは教えてもらってないんですよ。というか、私が聞いてないだけですけど。ママは尊敬できるけど、怖いんで」

そう言って、優迅は再び俺へと振り返った。

「パパは怖くなくてよかった」

俺はそんなに怖い女と結婚したのか。

「あ、でもママのこと大好きですよ。家族ですから」

「そうですか。素敵な家庭ですね」
マーガレットがちらりと俺に目をやる。恥ずかしいから、勘弁してくれ。
「それより、マーガレットさん。よくハイヒール履いて走ますね」
「秘書ですから」
優迅は僅かに首を傾げるが、彼女の笑みがこれ以上の問いに意味はないと語っていた。
「ちょっと、無駄口叩いてないで、早く走りなさいよ」
先頭を行くノエルが、甲高い声を上げる。俺はもう少しだけ、足元に力を込めた。多少は早くなった気がする。
「全く、何で、この街は、事件ばっかり……」
「そりゃ、マエストロが住んでるからだ」
「呪われてるわね」
ノエルの愚痴をアンダーソンが聞き流す。今更、何を言っているんだと思っているのだろう。

――本当に、今更だよな。

＊＊＊

☆――只今交渉中

負傷者もいる、女性も……といっても、心配はいらないか。それにしても、マエストロの家にたどり着くまで、早くて20分、いや30分か。追い付かれる可能性は十分に高い。

アンダーソンは、走りながら頭の中で考えていた。

今、襲われたらまずい。

しかし、彼の願いに反して、事態は悪い方向に向かっていた。

辺りに、不快なエンジン音が響く。それは、徐々に彼らの耳を大きく震わせた。鈴木と優迅

の顔が強張る。彼らにとっては、つい数時間前にも似たような音を聞いていたからだ。
瞬間、ひと際大きな音を響かせて、一台の車が彼らの前に現れた。鈴木たちも見覚えのあるもの。しかし、それは先ほどよりも幾分ダメージを負っていた。

「まじか」

鈴木は盛大なため息を零した。優迅も不快な表情をしている。

「なにあれ、敵？」

「だな」

二つ返事でノエルに答えるアンダーソン。そして、自己紹介をするかのように、彼らの目の前で停車した車から一人の男が下りてきた。鈴木が先ほど対峙した時とは違い、彼は肩に怪我をしていた。

「研究所の連中と喧嘩でもしたか？」

「ええ、ちょっと火遊びを」

アンダーソンの軽口に、ベルナルディは柔和な笑みで答える。

「協会はあんたを送り込んできたのか、本気ということだな」
内心、このような銃器使いを送り込まれた柳に同情しつつ、アンダーソンは決して油断をすることはなかった。既に冷や汗が背中を流れている。簡単な相手ではないと、重々理解していた。
「え、どうして？」
ふと、緊張感で静まる道路に、間の抜けた声が木霊した。
思わず、全員がそちらに視線を移す。声を上げたのは、マーガレットだった。
驚きの表情を浮かべる彼女、一方のベルナルディは涼しげな声色で彼女に手を振った。
「やあ、マーガレット。久しぶりですね」
「信じられない、どうして、あなたがここに」
「それは協会の意思ですから」
「最悪ね」

マーガレットは普段では考えられない程の悪態をついて彼を見据えた。
しかし、すぐに彼女は視界から男の存在を排除する。
「ひどいな、こちらを向いてくださいよ。昔は共に愛を育んだ仲でしょう」
「知りません」
依然として、彼女はそっぽを向いている。そんな部下の態度が珍しく、アンダーソンもノエルも呆然とした顔で彼女に問いかけた。
「お前、あんなやつと付き合っていたのか」
「あんなのが好みなの？」
「違います。若気の至りです。今では、一生の恥ですけど」
冷静な口調で答えるマーガレット。そんな彼女をベルナルディは終始、興味深げに見ていた。
「協会の配慮ですかね。昔の恋人との再会を援助していただけるなんて」
「黙りなさい」

彼女の凍てつくような視線に、思わずノエルは後ずさる。一方の、ノヴェーラはようやく事情を把握したようで、曇り一つない無垢な瞳をベルナルディへと向けた。

「ベルナルディさんは、あの女性とお付き合いをされていたんですか？」

「ええ、それはもう、真実の深い愛を」

否定する気も失せたのか、マーガレットはじっと男を睨みつけていた。無言の圧力とは心底怖いものだ、アンダーソンは改めて女性の怖さを思い知っていた。

「その子供は、あなたのですか？」

「ノヴェーラですか？まさか、彼は私の良き友人ですよ」

「そうですか」

質問を終えると、マーガレットはすっとノエルへ目を向けた。

「お願いします」

「え？」

「あの男、処分してください」

「え、あ、はい」

確かに彼らを倒さなければ前に進めないのは事実だ。しかし、彼女だけ、明らかに鈴木たちと比べて気迫が違う。

「マーガレット。あまり邪険にしないでください。それと、そこの2人。今度は本当に手加減できません。今の内に、こちらに来ませんかね？」

「お断りだ」

鈴木は間髪入れずに、彼の要求を断った。ベルナルディはほんの少し気落ちしたような顔をすると、次の瞬間には、拳銃を構えていた。

床に放たれた一撃は、ボンっというくぐもった音を立てると、あっという間に煙を充満させた。

「煙幕!?」

鈴木が動揺している最中、アンダーソンが一足早く、ベルナルディの元へと突っ込んだ。左からの攻撃を何とか防いだベルナルディ。彼はこの煙に乗じて、未来人の確保に急ぐが、

「ノエル、前に２０、右に2」

「これ、預けた」

マーガレットの指示を受け、ノエルは鈴木に一枚の紙を預けた。それは、魔女の家までの道を描いたものだ。

「おい、ノエル」

鈴木が彼女を呼び止めるよりも早く、ノエルはベルナルディに向かって走っていた。マーガレットは引き続き、端末を用いて、彼女に指示を与える。そんな様子を、鈴木は黙って眺めているだけだった。

「何してる、バカ!!早く行け!!」

「お前」

「どうせ、こういう役回りよ」

普段ならやかましいノエルの怒号も、今はありがたい。そう思った鈴木は、彼女が牽制している横を通り過ぎようとした。

「そうはしません！」

「それはこっちのセリフ!!」

ノエルは拳銃を取り出して、男に向けて放った。周囲の煙は未だに消えない。ノヴェーラも迂闊には動けない状況だ。

やがて、煙幕の効果が終わった頃には、鈴木と優迅は消えていた。

「逃げられましたか。これは、手早く仕事を終わらせて追うしかないですね」

やれやれとため息を零すベルナルディ。彼は、改まった様子で、3人へと向き直った。

「さて。自己紹介からいきましょうか。あなたたちは一体何ですか？」

「2代目！」

「秘書です」

「あー……っと、じゃあ運転手で」

そして、得意げな顔をしたノエルが一歩前に出た。

「私がリーダー。そして、私たちが運営する探偵事務所を、どうぞよろしく」

＊＊＊

「さすが、ハンス・ブリーゲル。指導力にあふれてるね」

時宮葵は、屋外で鍛錬中の優歩を見つめながら、そう呟いた。ハンス・ブリーゲルと呼ばれた老人は、座ったままの指導ではあるが、彼の目つきは常人のものとは思えないほど鋭かった。

室内からその様子を見る鈴木。彼は、自身の息子がどんなに怪我をしようが、じっと黙ってその鍛錬を見守っていた。

「見てて辛いなら、見なければいいのに」

葵の軽口を、鈴木はすかさず否定する。

「辛いなんて一言も言ってないだろ」
「そう？お前は、見た目以上に繊細だからさ」
友人の指摘に鈴木は何も返さない。それが正解でも、不正解でもないからだ。
「お前の能力は、もう自由自在なのか？」
「そうだね、ある程度は。けど、自分以外の他人を移動させるなら安心してくれて大丈夫だよ。こっちのほうが成功率は高いから」
「そうか、それならよかった」
「それにしても、本当にあの時代でいいのか？日本に帰ってきて間もない。俺たちが、高校生の時の方が、仲間も多いと思うけど」
すると、鈴木は葵の提案を冷静に否定した。
「いや、精神的成長が終わっているほうがいい。高校時代は目の前のことに手いっぱいだし、二十歳のころは俺自身が現実を受け止め切れていない。それに、あの時代は2つの勢力が一番弱くなっている頃だ」

あの時代とは、ingショックの後、研究所の力が激減した頃であり、協会も魔女との契約で、動きにくい時期。つまり、3勢力が互いに好き勝手に動けない時代だ。

葵も、鈴木の言い分は十分に理解していた。

「まあ、決めるのは鈴木だ。それで、先に優迅を送るんだろう？」

「ああ、その後すぐに、優歩も送る。そのための鍛錬だ」

「それにしても、重要になってくるのは、当時のお前だぞ」

葵の指摘に、鈴木はふと、必死に体を動かしている優歩に視線を移した。強くなるために鍛える少年を見て、思うところがあったのだろう。

「頼みの綱は、当時の俺の力だな」

「力？」

「俺はもう覚えていない。けど、現実に目を背けず、前に進む力。それを優歩に教えてやれるのは、過去の俺しかいない」

その言葉を聞くと、葵は清々しさを纏った顔で頷いた。

「なるほど、可能性が1%でもある限り、見過ごすことはできないってことか。いいね、俺は好きだよ。そういうの」

「そういうと思ったよ」

そして、鈴木は静かに笑みを浮かべた。

「優歩は強くなれる」

# COMPANION

第六話

## ノヴェーラ

| | |
|---|---|
| 生年月日 | 11月11日(10歳) |
| 血液型 | B型 |
| 出身地 | ライデン |
| 特術 | 本一冊を1時間以内に暗記することができる |
| 好物 | ストロープワッフル |

Companion

# ノヴェーラ

Novella

★――守株待兔

徐々に呼吸が乱れていくにつれ、全身から汗が噴き出るように、痛みが戻ってきた。先ほどまでは、気を逸らせる術があったが、今はただ静かに走り続けるしかない。必然と、意識は傷口へと向かってしまう。

暗い。街灯一つない道を走る。暗闇は嫌でも、心の中に入ってくるかのように、俺を不安にさせた。

「もう少しだ、頑張れよ。優迅」

「うん」

本当に励ますべきは自分だ。俺は内心そう思いながら、娘の顔を見る。俺なんかよりも幾分、

頼もしい。
「このまま何もなければいいが……」
「そんな簡単ではないだろう」
俺の問いに答えたのは見知らぬ声だった。いや、この声は聞き覚えがある。俺はとっさに優迅の手を握り、辺りを見回した。
「誰だ」
「忘れたのか？寂しいな、一緒に生死の境を共にしたじゃないか」
月明かりが路上に降り注ぐ。
男は、俺たちの前を塞ぐようにして立っていた。
「お前は」
思わず俺は息を飲んだ。俺の動揺が伝わったのだろうか、優迅も握る掌を一層強くした。
「こんばんは、鈴木聡太くん」

そうだ、こいつの名前は、

「ロベルト……!!」

＊＊＊

☆――大人の事情

「第三次著作権事件……というべきでしょうか。あの事件以降、あなたへの攻撃は不可との指令が下ったのですが」

ノエル・スイート。彼女には、現在金色の魔女と同等の権利、待遇が与えられている。ベル

ナルディは、懐から小石を取り出し、悩まし気に掌で弄んだ。
「しかし、ここで任務失敗となれば、私も大目玉を食らってしまう」
「それが部下というものの運命だろ？」
アンダーソンが茶化すと、それに答えるようにベルナルディも口元に笑みを浮かべる。
「そうですね、アンダーソン・カイル。あなたはよくご存じでしょう」
そして、彼はしばらく考えこむように腕組をした。
「困りましたね、広く言えばこの都市全域が不可侵領域みたいなものですよね。ああ、銃口は下ろしてください、ノエル・スイート。私はあなたより20は上です。年長者は敬うべきですよ」
ベルナルディはぶつぶつと呟きながら、ノエルを諌めた。そして、やっと考えがまとまったのか、ふむと、彼は頷いた。
「ここで戦えば条約違反となる。しかし、あなたたちには私を攻撃する理由があるということですね。なら、話は簡単だ」

そういうと、ベルナルディは手にしていた石ころを宙に投げた。
突然の動きに、思わずノエルは引き金を引く。当然、銃弾は的を外し、男の後方にある車に穴をあけた。
「何するんですか。全く、今日は災難ですね……まあ、今更の話ですか」
地面に落ちた石ころ。それは何も反応することはなかった。アンダーソンは、不思議に思い、石ころを足でどかそうとする。瞬間――、
「駄目です!!」
慌ててマーガレットが制止するが、
「1、2……」
石ころは地雷のようなものだった。アンダーソンが踏みつける寸前、
「3」
ベルナルディのカウントと共に、石ころは大きな音を立てて爆発した。

＊＊＊

☆――交渉失敗

「ロベルト！」

掛け声と共に、鈴木は懐から2つのナイフを取り出した。すかさず、地面に向けてそれを放つと、彼は前へ大きく踏み出す。ナイフには「加速」の文字が刻まれていた。

走りながら、クロスボウを放つ。惜しくも、矢は近くの街灯に当たるが、彼はすぐに左手にもっていたワイヤーを投げた。今度こそ、それはロベルトへと命中した。

「どうして、生きているんだ」

右手に巻かれたワイヤーを頼りに、鈴木は一気にロベルトとの距離を詰める。そして、彼の顔面に思い切り拳を叩きつけた。

「な……」

思わず漏れた驚き。

鈴木は自身の感覚に疑問を抱いた。

――なんだ、今のは。

ぐにゃりと沈む掌は、まるでスライムを殴ったかのような感覚だった。

瞬間、鈴木の目の前にいた影は液体となって飛び散った。

同時に、彼は優迅との距離を開けてしまったことに気づく。振り返ると、彼女の背後に黒い影が迫っているのが見えた。

「優迅!!後ろだ!!」

慌てて身を翻す彼女の元へ、鈴木は再びワイヤーを飛ばした。

見事にそれは黒い影の足のような部分に絡みつく。しかし、またしても影は液体となって崩れ落ちていく。

「どういうことだ……」

確かに、ロベルトはこの場に存在していたはずである。

しかし、実体がない。

いくらその姿を捉えても、すぐにそれは液体に変化してしまう。

「ロベルトじゃないのか？」

「いや、私はロベルトだ」

声が聞こえたと同時に、鈴木は麻酔銃の口をそれに向けた。

「前にも言っただろう。年長者は敬えと」

「どうせ、また偽物だろ」

「いいや、私は本物だよ。先ほどまで君が相手をしていたのは影だ」

街灯の明かりが点滅を繰り返す。それは鈴木の内面を映しているかのように不安定だった。そんな彼を支えるように、優迅はロベルトを睨みつけた。

「なるほど。中々、簡単にはいかないみたいだ」

面倒くさいと小さく零した後、ロベルトは暗闇を振り返った。

「どうする、マルセン」

彼の背後の暗闇から、小さな影が顔を出す。その姿が明かりに照らされると同時に、鈴木の顔に衝撃が走った。その名前を呼ぼうとするが、上手く言葉が紡げない。目の前の現実に、彼は完全に打ちのめされていたのだ。

「その顔をやめろ」

先に口を開いたのはマルセンだった。

「マルセンは、ノエル・スイートではない。マルセンは、マルセンだ」

奇妙な話し方をする少女に、優迅も驚きを隠せずにいた。

「ベースが同じだから間違えるのは仕方ない」
そうだ、ノエルは改造人間だ。その事実を忘れかけていた鈴木は、マルセンの言葉を受けて気づかされた。
「一体、何を企んでいるんだ。研究所まで何故こいつを狙っている」
「マルセンも協会の介入は予想外だった。だが、そこの未来人の能力を把握されないわけがない」
「目的は、やっぱりあのノートか」
すると、マルセンは否定した。
「マルセンの目的は本体だ」
そういって、彼はロベルトに目をやった。ロベルトはため息を零し、ポケットから小型の爆弾を取り出す。爆弾にしては薄く、ほとんど紙切れと変わらない。
しかし、鈴木はその威力を以前の戦いで体感していた。
下手に動いてはやられる。かといって、こちらの攻撃手段はナイフのみ。しかも、これはサ

ポート用なので実戦を目的としたものではなかった。
「安心しろ。君が無駄な行動さえしなければ、こちらも攻撃をするつもりはない」
「けど、あんたらはこいつを連れていくってことか」
「半分は正解だ。マルセンはただ昔の体に戻りたいだけだ」
「昔の体？」
鈴木の疑問に答えるように、マルセンは、すっと自身の体に手を当てた。
「マルセンは、元々普通の人間だ」
「なんだと？」
改造人間の体をした男が口にしたのは、到底考えられない言葉だった。思わず、鈴木は息を飲んで彼の言葉の続きを待つ。やがて、彼は、遠い記憶を手繰り寄せるように言葉を紡いだ。
「数年前、そうだね、君が介入したingショックの時だ。マルセンは改造人間を製造する立場の人間だった。ノエル・スイート。これはマルセンの最高傑作に違いなかった」

「ノエルを作った人間……？」
改造人間に人間の魂が宿っている？
何とかしてその状況を受け入れようとしている鈴木たちに対し、マルセンは不意に口を挟んだ。
「ちなみにマルセンは男だ。今年で４０になる」
「え……気持ち悪っ」
またしても衝撃的な事実に、優迅は思わず苦言を漏らした。そんな娘の発言をフォローするかのように、鈴木は慌てて言葉を足した。
「なるほど、だから早く元の姿に戻りたいってことか」
鈴木は改めてマルセンを見据えた。見た目は、ノエル・スイート。ほんの12歳の少女にしか見えないというのに、中には中年のおじさんの魂が入っている。とんでもない状況に、思わず鈴木は手元のワイヤーを落としそうになった。
「不自然だということはマルセンも分かっている。だが、生きるためには仕方ない選択だった」

「あんたが戻るには具体的にどうするんだ」
「簡単だ。彼女の能力になら元に戻す方法もあるはず。能力名はわからなくても、文書の中からある程度の特徴を書き記せば発動するはずだ」
その言葉を聞いて、すかさず鈴木は否定した。
「etcの文書はもうないはずだ。それはもうリニアの体と融合した」
「いや、ベルコルが集めたコピーが存在する」
マルセンは断言した。
「これは脅迫ではない。一種の要請だ。元の体に戻れれば、彼女に用はない」
それは優迅の解放を意味した。
しかし、本当に協力をしたところで生かして返してもらえる保証もない。そもそも、鈴木は根本的な問題に疑問を呈した。
「肉体は若返った。それも改造人間なんていう頑丈な身体になった。それなのに何故元の体に戻ろうとする？」

すると、マルセンは初めて鈴木から視線を逸らした。
「マルセンたちが、怪物を作り上げてしまったから」
彼は暗い、暗い夜の闇を一心に見つめていた。
「改造人間というのは、人間と似ている。いや、同じと言っても過言ではないだろう。頑丈な体を持ち、思考する力を持ち合わせている。思考するということは、とんでもないことなんだ」
それ故、彼は改造人間の思考に制約を与えた。
「幾つもの改造人間と戦ってきた君なら既に知っているだろう。思考を制限することにより、ただ戦い続けるだけの機械を生み出した。おかげで研究所の戦力は大幅に向上した」
「それと、あんたの体を元に戻すことに何の関係がある」
「簡単な話だ。本来の体からこの体に移動する際、バグのようなものを起こした。もともと全く違う構造をしているんだ。結果、マルセンの体は拒否反応として言語回路に支障が出た。そして個人の性格さえも、改造人間の思考に食いつぶされていく。やがて、この体はマルセンという個人を宿した、別の何かに生まれ変わるだろう」

個人が食いつぶされていく。それは、一体どういった感覚なのだろうか。鈴木は一瞬、想像をしてみたが、あまりの胸糞悪さにすぐに考えを停止させた。

「協力しろ、鈴木聡太」

「……元に戻るなら、前と同じ方法を使えばいいんじゃないのか？」

「魂の移動は本来、奇跡にも近い行為。一種の賭けと同じだ。ならば、より確実なetcを用いようとするは当然だろう」

「要するに、身の安全が一番ということか。それはおかしな話だな」

かつて、研究所が引き起こした戦争。その戦いで一体どれだけの人間がなくなっただろう。それでも、目の前の男は自身の安全のために優迅を渡せと言っているのだ。

「マルセンは死にたくない。未来人の身は保証する」

マルセンは再び前を見据えた。視線の先は優迅ただ一人。

「嫌!!」

男の視線を拒絶するように、彼女は声を荒げた。

「知らない人に連れてかれて、利用されるなんて絶対に嫌!!私がここに来たのは、パパに会うため!!ママが教えてくれた、この大切な能力の使い方は私が決める!!」

少女の主張を、ロベルトは感心した様に見守っていた。

「全くの正論だ。マルセン、反論の余地はなさそうだ」

「うるさい、ロベルト」

鈴木は一歩、優迅の前に出た。

「よく言った。未来のママは立派に育ててくれたみたいだな」

彼女の頭を優しく撫でると、鈴木は戦闘態勢に入った。そんな彼を見て、ロベルトは手元の小型爆弾をつまらなそうに指で弄ぶ。

「この爆弾の威力を知っているだろうに怖くないのか」

「生憎、危険な場面は何度も乗り越えてきた身だからな。今回も悪運が俺を助けてくれるだろ」

賭け事めいた物言いに、ロベルトは、つい口元を緩めた。

「ある意味、デウス・エクス・マキナか」
「いや、神に解決してもらう道理はない」
緊張感が一帯を覆う。どうやら説得は不可能の様だ。そう考えた、マルセンはロベルトの隣に並んだ。
「そういえば」
ふと、ロベルトが思い出したように顔を上げた。
「さっき相手した中にも未来人がいたな」
「未来人？誰のことだ」
「リニア・イベリンと共にいた少年。君の息子だと言っていたが本当か」
相手の言っていることが全くわからない。
恐る恐る、鈴木は優迅へと振り返った。
「俺、息子もいるの？」

「え、ああ。弟がひとりいるはず……一度も会ったことないけど」
鈴木の頭はパンクしそうだった。
ただでさえ、子供が2人いるということに衝撃的だというのに、優迅は会ったことがないという。一体、未来の自分は何を仕出かしたというのだろうか。
鈴木はそっと、自身の未来を案じた。

＊＊＊

☆――おかあさん

「もう大丈夫だね」
リニア・イベリンは肩に包帯を巻いてため息をついた。
近所のコンビニで最低限の薬を購入し、応急手当をする。もちろん魔法を用いての治療も行

ったため、出血は既に止まっていた。
ふと、リニアは深刻な表情を浮かべながら優歩をまじまじと眺めた。
「何」
「いや」
躊躇うようにリニアは、彼から視線を逸らし、街の方に目をやった。先ほどの爆発が嘘のように静まり返った世界。既に、時計は3時を過ぎていた。
「どうするの？」
「うーん」
奏の問いに、リニアは曖昧な答えを返す。どうするべきか、決めかねているようだ。
「そもそも何で君はここに来たんだっけ？」
「親父が勝手に……」
未来から来た少年と少女。まずは彼らを引き合わせるところから始めた方がいいかもしれな

い。そう考えたリニアは、突然近くのベンチの足を蹴った。

――気に食わない。

リニアは先ほどの少女を思い出し、何故かむしゃくしゃとした気持ちになっていた。

「リニア、公共器物破損」

奏の指摘も今の彼女の耳には入ってこなかった。リニアは今、鈴木に腹を立てているのだ。未来からの少女。娘だと主張するが、確たる証拠はどこにもない。鑑定書の偽造なんていくらでもできる。だというのに、彼は何故そんなに必死になって少女を守るのか。

「奏、携帯貸して」

大人しく渡したほうが楽だと考えた彼女は、しぶしぶ携帯電話を取り出した。

「え」

その声に2人は彼女へと振り返った。

「どうかした？」

「圏外になってる……」
こんな都心で圏外になるはずがない。しかも、3週間前に買い替えたばかりの新品だ。奏は腕を振り回して電波を拾おうとするが、画面の2文字は全く変化を見せなかった。
「電波妨害ね、おそらく研究所の仕業だわ」
「どうするんだよ」
「そうね、お父さんのところへ連れて行ってあげる」
すると、優歩は慌てて首を振った。
「べ、別に、俺は親父になんか会いたくない」
「けど、そこには君のお姉さんがいるから、仕方ない」
優歩はため息をつきながら、頷いた。彼の目的は、実の姉を探して共に未来に帰ることだった。
「でも、どこにいるかわからないんだろ。携帯も使えないし」

すると、奏は彼の背中を叩いて、遠くの方を見るように促した。
「聞こえた？」
その言葉に、彼は頷いた。
「小さいけど、爆発音が聞こえる。ほら、また」
「さすが。耳がいいね、姉さん。あそこに向かえばいいってことか」
「それは、わからない」
「え」
ぽかんと口を開ける優歩。そんな彼をおいて、奏はリニアに向き直った。しばらく考え込んでいたリニアは、はっと閃いたように顔を上げると、
「先生のところに戻ろう」
「え」
揃って驚きの声を上げる2人。そんな彼らを説得するように、彼女は続けた。

「きっと聡太は先生のところに向かっているはず。この都市で一番安全な場所は金色の魔女の家だから」

「じゃあ、その道の途中にいるかもしれないってことか」

「そういうこと」

にっこりと、リニアは優歩に笑いかけた。そして再び走り出す前に、リニアはひとつだけ気にかかっていることを尋ねた。

「私でも奏でもないのは、わかったんだけど……せめて、お母さんの名前だけ教えてくれない？」

「名前？」

呆れたように声を上げる優歩。しかし、すぐに彼の顔は悩ましげなものに変わった。

「母親とは一度も会ったことはない。だから、旧姓まではわからないけど」

躊躇うように、優歩は一度口をつぐんだ。そして――。

「ロミ」

「え？」
「親父が鈴木だから。鈴木ロミ。あとは何も知らない。俺は、親父とおじさんに育てられたから」
「おじさん？」
すると、優歩は口元に手を当てて考え込んだ。
「外国人のおじさん。ハンス……なんとかって人。その人に武術とか習ったんだけど、厳しい人でずっと毎日鍛錬させられてた」
優歩は不満げに愚痴を零すが、リニアも奏も全くその言葉が耳に入っていなかった。
「お母さん、日本人じゃないって言ったよね？」
「ああ、うん。おかげで髪の毛もこんな色だし」
優歩は、自身の毛先をくるくると指で触った。
まるで尋問をされているかのような雰囲気に、先に嫌気を差したのは彼の方だった。

「いいから、早く行こうよ」
そういって踵を返す少年の肩を、リニアは物凄い速さで引き留めた。
「いったいな。どうしたんだよ、おばさん」
「さっきの!!」
「え？」
リニアは息も絶え絶えに、少年に問いかけた。
「さっきのこと!!真実ね!?神に誓って!!」
鬼気迫る表情のリニアに気圧されながらも、少年は呆れたように彼女を見上げた。
「こんな嘘……、つく理由がない」
リニアは何も言わずに優歩を見つめていた。対する、彼は奏に助けを求めるような視線を送る。
しかし当然、奏もその場で固まったまま機能していなかった。

「嘘じゃ、ないのね？」
「だーかーらー、そう言ってるだろ」
ぱっとリニアは優歩の肩から両手を離した。そして、彼女は全力で走り出す。
「ちょっと、おばさん!!急に走り出すなよ!!」
慌てて、優歩もその後を追う。
ふと、リニアは振り返った。
「ロミは、私の本名だ!!」
「は？」
突然の告白に、優歩の口は塞がらない。
足だけは機械的に動作を続けるが、脳内の思考回路は断絶されたように、頭の中は真っ白と

なった。
しばらくして、彼はリニアの言葉の意味を理解した。
「はあああああ!?」
＊＊＊

☆――瞬間接着剤

弾丸を入れ、照準を合わせる。そして、引き金を引くと、弾丸は相手に向かって放たれた。
しかし、何故か命中しない。
魔法のようなものを用いているのだろうか、おまけに彼らの前にある車は防護壁として十分機能していた。
アンダーソン・カイルがすかさず前に出る。瞬間、車の影から小さな爆弾が投げられる。彼

は急いで身を引く。
30分以上もこのような戦いが続けられていた。
マーガレットのサポートも非常に優秀だが、それ以上にベルナルディという男の実力は強大だった。余裕のある笑みを彼は未だに崩さない。
「もうやめましょう」
「何言ってるんだ」
ノエルが再び次弾を準備する中、彼はがっかりとした様子で肩を落とした。
そして黒ずみが目立つ車に背中を預けると、淡々と意見を述べる。
「このように意味のない消耗戦は無駄なことかと。こんなことをしている内に研究所が迫っているかもしれませんし」
「研究所だと!?」
咄嗟にアンダーソンは鈴木たちの向かった方向に目を向けた。

「実はここに来る前に研究所の方々にお会いしまして。彼らも未来人の確保に勤しんでいましたよ」

それ故、停戦を申し込んでいるのか。アンダーソンは彼の言葉に悩まされていた。今ここで戦いをやめて、鈴木を追うべきか。それともこれは単なる口車に過ぎないのか。

「あなたもご存じの通り、協会の目的は現状の維持です。我々は未来人を元の世界に返すことが目的です」

事実、子どもひとりを守りながら研究所の連中と戦うのは難しい。それはアンダーソンも理解していた。ならば、ここで戦いをやめたほうがいいのではないだろうか。

「話を詳しく聞かせろ」

「ちょっと!!リーダーは私よ!?」

すかさずノエルが憤慨の声を上げた。銃弾が彼の足元で飛び交う。

「やめろ、危ない。一度、話を聞くだけだ。確かに奴らの言う通り、２人が研究所の人間と出くわしている可能性は高い。なら、援護に行った方がいいに決まってるだろ。だが、あんたらがそう簡単に通すはずがない」

すると、ベルナルディは当然です、と人差し指を立てて笑った。
「確かに我々は協会の人間として任務を下されました。それも休暇中にです。もちろん私も勤務時間外の勤務はお断りしましたが、気軽にやってくれればよいと言われてますので。まあ、ぶっちゃけると、私もノヴェーラも日本観光をしに来たんです」
「はあ？」
思わずノエルの顔が歪む。ベルナルディは構うことなく続けた。
「結果良ければ全てよしというでしょう。ですから、あなた方に未来人のことをお任せしようかと。あるべき未来へ帰って頂ければ、こちらとしても問題ありませんので」
「嘘よ!!こんなやつの言うこと聞いてはいけません!!」
マーガレットの非難に、彼は心底悲しそうな瞳を浮かべた。
「ああ、マーガレット。私はあなたと戦いたくはないのです。かつて、共に愛を誓いあった仲だというのに、こんな悲しいことはないでしょう」
その言葉に、マーガレットは悲鳴をあげて両耳を塞いだ。普段とは全く様子の異なる彼女にアンダーソンは呆れたようにため息を零す。

「信じられないわね、今更そんな提案をするなんて」
どん、とノエルが腕組をして前に出る。彼女の視線には相変わらず敵意が込められていた。
一方、ベルナルディは包帯の巻かれた自身の肩をきつく睨んでいた。
「これ、彼らにやられたんですよね」
「つまり、自分たちの代わりに敵討ちをしてくれってこと？」
「半分は正解です、さすが金色の魔女」
金色の魔女、その言葉にノエルは強く反応した。
「その名前を気安く呼ぶな。最初から望んで貰ったものでもないし」
「まあまあ。ああ、ちなみに、もう半分はノヴェーラにも実戦の経験をさせたいと思いまして」
すると、今まで黙って警戒を続けていた少年がぱっと顔を上げた。
「ベルナルディさん。別に、僕は、こんな実践経験する必要は……」

「経験は宝ですから。できる時にするものです」

有無を言わせない彼に、しぶしぶノヴェーラは頷いた。もはや、彼らには戦闘を継続する意思も理由もないようである。アンダーソンは、決めかねるようにノエルを振り返った。彼女も必死に考えを巡らせているようである。

――彼らの言葉を信じてもいいのか。

＊＊＊

☆――長回し

戦うか、逃げるか。答えは一つしかない。

言葉でいうのは簡単だが、実際はそんな風にはいかない。

鈴木は自身に襲い掛かる敵を見据えて、そう考えた。彼らを避けて逃げなければいけないが、

戦わなければ逃げられない。ならば、戦うしかないのだ。
優迅も援護に回ろうとするが、相手は爆弾魔と改造人間。普通の相手ではなかった。
改造人間が前に飛び出してくる。鈴木はすかさずナイフを地面に放った。そして、彼は後方へ素早く抜けた後、その勢いでワイヤーを彼の足に向けて投げた。
瞬間、ロベルトが小さな爆弾で援護に回る。ボンッという短い音と共に、ワイヤーはその場で崩れ落ちていった。
そのまま彼は鈴木に向けて、別の爆弾を放つ。鈴木はすぐにワイヤーを背後に伸ばして、後ろへ大きく飛んだ。
なんとか彼は自身へのダメージを最小限に抑えた。しかし、そのタイミングでマルセンが優迅へと迫った。彼女もじっとしているわけではない。
優迅は「物取り」の能力を使用して、空気弾を連射した。まるで散弾銃のように、縦横無尽に放たれる空気弾。マルセンは舌打ちをして防御へと転じた。数滴の真っ赤な血液が地面へと零れ落ちていく。その姿を見て、優迅は思わず掌を引っ込めた。
「あ、えっと、その」

自身の行動に罪悪感を覚えたのか、彼女の手は震え始める。

「優迅！」

慌てて、鈴木は優迅の元へと戻った。

そして彼はロベルトに向けてワイヤーを放つ。しかし、それは彼に向けられたものではなかった。ワイヤーはロベルトの後方に刺さっていたナイフへと、まっすぐに伸びていく。そして、ナイフの柄を掴んだと判断すると、それを一気に引き戻す。ブーメランのように彼の元へ帰っていくナイフは、途中ロベルトの腕を掠めていった。

「へえ、随分と応用力がついたね」

「偶々だ。あんたに運がなかっただけだろ」

そういって、鈴木はナイフを構えなおした。

ロベルトという爆弾魔が、いつ近くの建物に爆弾を投げ込むかもわからない。実際、彼は以前2か所の建物を爆破した男だ。そして、改造人間の方は更に厄介だ。優迅の確保が目的ならば、ダメージを無視した突進でそのまま連れていかれる可能性も十分にあり得る。

鈴木は最悪のパターンを何回も脳内でシュミレーションしていた。

「優迅、そのノートには他に何が書かれている」
「えっと……空間、生成？」
優迅には聞き覚えのない言葉だった。葵の指導の元、彼女はこの能力を書き入れたが、今まで一度も使用したことはない。対する、鈴木はどこか安心したような顔をしていた。
「俺が合図したら、それを使ってくれ」
優迅が頷くと、鈴木は再び相手を見据えた。
「ロベルト、お前にしては随分とかわいい爆弾ばかり使ってるじゃないか」
「ああ、私も派手にいきたいんだけどね。あまりうるさくすると、君のところのボスに叱られちゃうから」
残念そうに笑みを浮かべると、彼らの会話を聞いていたマルセンが忌々しそうに口を挟んだ。
「マルセンたちの目的は、あの未来人の確保だ。手段と方法は選ばない。もっと大きな爆弾を使え。多少の建物の崩壊は仕方ない」
「馬鹿言うな!!普通に住んでいる人たちがいるだろう!!」

「笑わせる。マルセンたちに道理を説くのか？」
彼の言葉に、ロベルトもまんざらではない様子で爆弾を取り出した。先ほどよりも大きな塊だ。
地面に落ちた瞬間、それは先ほどの数倍は大きな音を立てて爆発した。直径2メートルほどの穴がごっそりと抉られる。
「こんな爆弾、そこら中に投げたら大変だろうね」
周囲に立ち並ぶマンションやビル。これほどの穴が何個も空けば、倒壊は免れないだろう。
「優迅！縦５０、横５０だ!!」
鈴木の叫びと同時に、一瞬にして辺りは真っ白な空間へと様変わりした。
「そうか、これが空間生成……」
思わず零れる言葉。ロベルトの瞳にも、驚きと感動が含まれていた。
「これなら周囲への心配はないだろ」

「追い詰めたつもりだろうが、実際追い詰められたのはお前たちのほうだぞ」
すると、鈴木は、にっと口元を緩めた。
「いや、俺たちは逃げるさ。優迅!!」
すかさず彼女は鈴木の手を取る。
次の瞬間、彼らの体はさざ波のように揺らめき始めた。そしてゆっくりと、その形をなくしていく。10秒も経たないうち、2人は空間の外へと抜け出していた。
「パパ!!30分が限界!!」
「わかった」
すぐに彼らは走り出した。効力が消えるまでの30分、それまでに天城の元へ到着すれば、鈴木たちの勝利は同然である。
時刻は、4時を回ろうとしていた。

＊＊＊

忙しなく、娘が動きまわる。

先日、葵が言っていた過去に送るという話が進んでいるのだろう。

私は何かを懐かしむように、彼女を見守った。

思い浮かべる彼の顔は、自分の旦那だというのにぼんやりとしている。無理もない、13年も顔を見ていないのだ。むしろ、若いころの顔の方が馴染み深い。

すぐそばにいるのに会えない。それは向こうも同じだった。日本にいる今、彼の家はそう遠くない。それでも、私たちは会うことはできない。

そっと、自身の黒髪を触った。

徹底的に身分を隠すために染めた、真っ黒な髪。これは私の覚悟の証だった。

目をつぶり、彼を思う。

彼は、優歩もetcを宿していると言っていた。優歩は後天的に覚醒する性質で、今はハンスと共に鍛錬をしているという。もう、彼はetcを使えないから。現実を受け入れることができない彼に対し、優歩が覚醒をすれば彼女の命は助かるはずである。

これからの未来、私たちの未来のために。

私は、まるで修学旅行に出かける娘を見送るかのような気持ちでいた。